

「子どもの豊かな創造性を育成するための造形活動」事業

親子で一緒に楽しみながら幼小児の主体性と創造性を育む
造形教室を年間通して継続的に開催する

描いたり作ったりする造形活動は、子どもの感性を豊かにし、創造性や社会性を育む。東京都内の幼稚園と小学校の美術担当教員有志で立ち上げた「東京都幼小児造形教育研究会」では、幼児から小学生の美術教育をひとつながりで考えていこうという視点に立ち、子どものための造形教室を企画。本年度は、乳幼児を対象にした表現活動の場と、親子陶芸教室を開設した。

初めての絵の具との出会いを楽しむ
乳幼児のための造形教室

汚してもいいように床一面にマットが敷かれた教室では、2歳前後の子どもたちが母親と一緒に思い思いのやり方で絵の具を楽しんでいる。絵の具の筆を持って床に寝転がっている子。お母さんに手のひらに絵の具を塗ってもらい紙の上を叩いて手形をつけるのに一生懸命な子。絵の具の水入れの取っ手を興味津々で玩んでいる子もいる。これは、乳幼児対象の造形教室「絵の具なないろ」の

ある日の光景。

「絵を描くというのは大人概念であって、描かないという表現をしている子どもには無理に描かせない。押しつけられると嫌いになったり苦手になったりしますから。子ども自身が感じて工夫し始めることが大事なのです。子どもというのは有能な存在で、いろんな能力を潜在的に秘めていますから、それを引き出すような環境をつくってあげるのが教室の目的です」と話すのは、東京都幼小児造形教育研究会の会長の辻政博さん。小学校図画工作専任教員歴30年、現在は帝京大学教育学部専任講師、学習院大学兼任講師、東京都図画工作研究会顧問などを務める造形教育のスペシャリストである。

東京都幼小児造形教育研究会は、廃校になった四谷第四小学校を利用して市民の芸術活動を推進するCCAAアートプラザを拠点として活動を行っており、そのひとつが「絵の具なないろ」。お絵かき教室といえば通常は3歳以上の子どもが通うものだが、ここは2～4歳の未就園児を対象にした母子共同で造形活動を楽しむ教



教室では2歳前後の乳幼児が母親と一緒に思い思いに絵の具と触れ合う



「絵の具なないろ」教室のパンフレット



子どもは絵でいきいきと自分を表現する

室だ。子どもたちは初めての絵の具や粘土との出会いを経験し、部屋を汚すことを気にせずダイナミックに絵の具と触れ合うことができる。子育て真っ最中の母親にとっては息抜きであり、一緒に楽しみながら子どもとの向き合い方を学ぶ場であり、また母親同志の交流の場にもなっている。教室では辻さんの妻で版画家のはるさんが講師を務めるが、絵の描き方を教えるのではなく、あくまでも自由な表現活動へと子どもたちを導くのが役目。辻さんいわく、書き言葉を持たない乳幼児にとって造形活動は自分を表現する唯一の手段なのだ。

「たとえばクレヨンを持って力を入れて動かすと線が引けて、ぐるぐる回すと渦巻きができる。それは自分が働きかけると何かが起こるとい、最も主体的な最初の体験になります。言い換えれば自分の体を通じて自分自身を表現することであり、それはすごく楽しいこと。そんな時お母さんが『そばで見ているよ』『理解しているよ』の2つの意味を込めて声をかけてあげると、子どもは安心します。さらに講師が子どもに粘土などを渡して一歩先へ誘導してあげる。するとまた違う世界の扉が開くのです」

土いじりを介して親と子が触れ合う
親子陶芸教室

同研究会が実践するもうひとつの造形活動が「親子陶芸教室」。陶芸教室はたくさんあるが、小学生から親子で参加できる教室は珍しいだろう。陶芸は、「土を手でこねて成形することで主体的な体験ができ、さらに人間が獲得した原初的な手段である火を通すことで使えるものになるというかけがえのない経験ができる」造形活動である。しかも、親と子が互いに土に触れながら対話し、時にそっと手を添えてあげることで、子が親の、親が子の新たな一面を発見する機会にもなる。これこそ土を介した造形活動ならではの触れ合いといえるだろう。教室では陶芸作家の指導のもと、マグカップや花入れのほか、風鈴、クリスマスツリー、雛人形といった季節に合わせた飾りものを作陶する。久しぶりの粘土いじりに、むしろ親の方が夢中になっていることも多いという。「土というのは余分なものを吸収してくれるところがあるので、触っていると

担当者より



子どもの成長を育む場をつくっていきます

東京都幼小児造形教育研究会
会長
辻政博さん

子どもの成長を育む場をつくっていくことにお力をいただけてとても感謝しています。まだ始動したばかりであり目立った活動ではありませんが、丁寧に取り組んでいるつもりです。そこに目を向けていただいたAJOSCの見識に敬意を表しますとともに、これからのご支援をよろしくお願いたします。

落ち着くのではないですか」と辻さん。

2つの教室はそれぞれ月2回年間を通して開催され、人件費および陶芸教室の設備費用として主に焼成釜の稼働にAJOSCの助成が役立てられた。

子どもが興味を持って参加し、豊かな感性を育むのに最も適しているのは造形活動である。特に乳幼児にとっては新鮮な体験であり、筆や粘土などの道具を使った表現活動は心身の発育に大きく影響してくる。辻さんは、これまであまり教育の対象になってこなかった乳幼児にスポットをあてた取り組みを今後も継続していき、全国に発信していきたいと考えている。



親子陶芸教室の作品はどれも個性豊か